

2011 熱戦再来 北東北総体レポート

「北の空 君に無限の可能性」

全国高等学校体育連盟テニス部
常任委員 新居 弘行

<はじめに>

3月に東日本を襲った大震災。今回のインターハイはその被災地を開催地に、被災後わずか5ヶ月足らずの時期に行われる大会であるとともに、初のブロック開催、さらにテニス競技の次なる100年に向けての第1歩となる101回大会でもある。開催地の皆様、大会参加者、主催者、すべての人にとって意義深い、明日への活力となるような大会になることを願い大会はスタートした。

<開会式>

開会式では、前年度優勝旗、優勝杯の返還の後、青森山田高等学校 三浦雅斗、青森東高等学校 川浪沙紀子 両選手が選手宣誓を行った。震災の影響を受けながらも、大会が開催されることを感謝する言葉で始まった宣誓内容は、2人の次の言葉によって締めくくられた。「今私たちができること、それは、最後の最後まであきらめずに全力で戦うことで困難に立ち向かう勇気を示すことです。それがこの大会を支えてくれる全ての方々の気持ちに応えることになり、再び日本が復興する力になると信じます。ここに集った選手1人1人が必ず将来日本を元気にするパワーを持っていることを証し、心を一つにしっかりと絆を深める大会にすることを誓います。」



選手宣誓

式の前後に行われた青森東高等学校吹奏楽部による歓迎演奏、青森工業高等学校のねぶた・囃子方や県内テニス部員のハネトによる歓迎演舞、地元高校生バンド『ユートピア』が作詞作曲した大会テーマソングの演奏も会場の雰囲気は大いに盛り上げ、参加校の翌日の試合にかける思いを後押しした。



<団体戦>

男子ベスト8は次の学校。

湘南工大附(神奈川), 大分舞鶴(大分), 東山(京都), 相生学院(兵庫), 柳川(福岡), 清風(大阪), 大成(東京), 四日市工(三重)。

選抜大会優勝の相生学院が準々決勝で東山高校に敗れる波乱があった。残りの枠は選抜大会ベスト4の湘南工大附, 柳川, 四日市工が今回も勝ち, 準決勝に駒を進めた。

準決勝, 四日市工 対 柳川。シングルス1の後藤(四日市工)は井上(柳川)に対し序盤0-3とリードを許すがその後徐々にペースをつかみ, 10ゲーム連取で6-3,6-1。シングルス2の中島(四日市工)対増尾(柳川)は6-3,6-3で増尾。ダブルスの長田・萩(四日市工)対申・小坂(柳川)はファイナルセットまでもつれ, 一進一退の好ゲームであったが最後はブレイクチャンスで1回でものにした長田・萩が勝ち, 決勝進出を決めた。

東山 対 湘南工大附。ダブルスの倉地・小路(東山)対高田・高橋(湘南工大附)は, 元気のあるプレーで勢いを最後まで持続した高田・高橋が6-3,6-2で勝利。逆にシングルス1はミスの少ない安定したプレーに加えて一発の思い切りの良い長船(東山)が, 粘る松崎(湘南工大附)を6-3,6-2で押し切った。シングルス2の日下(東山)対今井(湘南工大附)。1stセットは一方的な試合で今井が取ったが2ndセット第3ゲームあたりから足が重くなり, そこを日下が前後左右にゆっくり粘り強く揺さぶってミスを引き出し6-2で取り返した。ファイナルセット今井も頑張ったが日下も要所要所を押さえ, 相手に流れを渡さず6-0で勝ち, 東山の決勝進出を決めた。

決勝戦, 四日市工業 対 東山。まずポイントを上げたのはシングルス1の後藤(四日市工)。長船とのNo1対決は気合いと気合いのぶつかり合いの好ゲームとなった。長船もよく拾い, 打ち合ったがサーブとフォアで勝る後藤が6-3,6-4で勝利した。長田・萩 対 トレド・倉地 のダブルスは紙一重の戦いであった。1stセット 4-0から4-4となり, 要所でストレートアタック, トップスピロボブが決まり6-4四日市工業。2ndセットもサーブスキープを確実にした長田・萩ペアが勝ち優勝を決めた。シングルス2中島 対 日下は昨年大会決勝戦で悔しい思いをした中島がすさまじい気合いで1stセット6-0。2ndセットはペースダウンし一時2-5となるが, そこから反撃し6-6となったところで打ち切られた。



優勝した四日市工業高校

女子ベスト8は次の学校。

富士見丘（東京）、湘南工大附（神奈川）、椚山女学園（愛知）、城南学園（大阪）、園田学園（兵庫）、早稲田実業（東京）、鳳凰（鹿児島）、宮崎商（宮崎）。

順当に勝ち進んだ3つのシード校と、2回戦で第3シードの秀明八千代（千葉）を破った園田学園がベスト4に入った。

準決勝の富士見丘 対 城南学園 戦は、シングルス1の伊藤（富士見丘）が安形に6-0,6-0で完勝し、優勝に向けた気合いを同時進行中の他の3人に伝えた。シングルス2は安定力で上回る久次米（城南学園）が6-3,6-2でとり、勝敗はダブルスにかかった。ファイナルセットまでもつれたダブルスは、池田・梶谷（富士見丘）が6-7(6),6-2,6-3で押し切った。優勝するには何が必要か知っており、それを1年間やってきて高校生活最後の集大成を見せた3年生ペアが、決勝戦への扉を開いた。

宮崎商業 対 園田学園 戦は気迫とストロークの安定感で上回る宮崎商業がシングルス2を2つ取り勝利を決めた。シングルス1は谷口6-1,6-4加治、シングルス2は松尾6-4,6-2山本、ダブルスは西・染矢4-6,1-3(打ち切り)池田・西口であった。

決勝戦は2年連続決勝進出の富士見丘 対 宮崎商業の顔合わせとなった。まずポイント上げたのがシングルス2の森（富士見丘）。ここまで3回戦のダブルスに出場したのみであったが、シングルス2を任せられ、深い球をベースに疲れ知らずの伸び伸びとしたプレーで松尾を圧倒した(6-2,6-1)。ダブルスは池田・梶谷（富士見丘）対 染矢・福留（宮崎商）。1stセットは、ポーチをはじめやること全てがうまくいった富士見丘ペアが6-0で取る。2ndセット宮崎商ペアはラリーで押されながらもボールをねじ込み返し、相手の勢いに食らいついていった。しかし接戦を富士見ペアが押し切り2年連続の優勝を決めた。シングルス1は全米オープン派遣選手の伊藤が、1stセット後半以降経験とテクニック、更にこの1年間での精神的な成長を見せ6-4,3-1で打ち切り。宮崎商の谷口も1stセット前半、互角以上の戦いを見せるなど悲願の初優勝に向けて健闘した。



優勝した富士見丘高校

<個人戦・シングルス>

男子ベスト8は次の選手。丸数字は学年。後藤翔太郎②（三重・四日市工・2年連続）須田昌賢③（群馬・共愛学園）、中島佑介③（三重・四日市工）、小村拓也③（宮崎・宮崎日大）、李在紋③（茨城・東風・2年連続）、守谷総一郎②（東京・大成）、松崎勇太郎③（神奈川・湘南工科大附）、弓立祐生③（愛媛・新田）。内訳は関東4名、東海2名、中国1名、九州1名であり、近畿からは1人も入らなかった。三重県をはじめ、群馬、宮崎、愛媛など地方の活躍が光った。

決勝戦は昨年準優勝の第1シード後藤と、四国勢として13年ぶりに決勝に進んだ弓立との対決となった。1stセット 落ち着いて試合をすすめる後藤に対して、弓立は 堅さ、力みによるミスが見られ、6-2で後藤が取る。2ndセットは弓立本来の当たりが戻り、攻め・守りともに しなやかさと切れのある後藤と、長身を活かして強打で攻める弓立、「牛若丸と弁慶」のような見応えのある戦いになった。弓立の強打が決まり3-1とリードし自分のサービスゲームで弓立優位に見えたが、後藤がブレイクに成功し3-2。試合の一つの節目を後藤がものにした。以降一進一退の攻防が続くが、この1年間でバックのリターンが向上した上に連続ミスでポイントを失うことが減った後藤が6-4でとり、昨年の雪辱を果たした。



弓立選手

後藤選手

女子ベスト8は次の選手。山本ひかり①（兵庫・園田学園）、宮地真知香③（福岡・折尾愛真）、林恵里奈②（福井・仁愛女子）、辻恵子②（東京・早稲田実業）、細沼千紗①（東京・富士見丘）、日比沙織③（神奈川・湘南工科大附）、西本恵③（岡山・岡山学芸館）、吉富愛子③（愛知・相山女学園）。関東3名、近畿1名、北信越1名、東海1名、中国1名、九州1名と、全国的に散らばった形となった。



第1、4シードが3回戦で、第3シードが4回戦で姿を消す混戦の中、第2シードの吉富と辻が決勝戦に駒を進めた。丁寧さと強打を正確に使い分ける吉富に対し、辻も丁寧に我慢したが、戦術を含めた総合力で勝る吉富が確実にポイントを重ね6-2,6-3で勝利。昭和49年の成田よしえ選手以来の優勝旗を愛知県に持って



吉富選手



辻選手

帰ることになった。吉富は前日、ダブルスとシングルスを接戦で戦い、10時間近くコート上にいた。試合中も自分の精神状態を客観的に見て、どんなときでも自分の気持ちをベストの状態に持っていこうとする隠れた技術が群を抜いていた。

<個人戦・ダブルス>

男子ダブルスベスト4は次の選手。栗林 聡真③矢多 弘樹①(大阪・清風), 李 在紋③韓 成民①(茨城・つくば国際東風), 渡邊 将司③伊藤 勇貴③(愛知・名経大市邨), 後藤 翔太郎②中島 佑介③(三重・四日市工)

決勝に進出したのは後藤・中島と李・韓。後藤ペアから1stセット3-6,2ndセット6-4のあとのファイナルセットは一進一退のキープ合戦となった。第7ゲーム東風ペア40-30からのダブルフォルトをきっかけに四日市ペアがレシーブから一気に攻め、ブレイク。直後四日市のサービスゲームはサイドアタックが裏目に出て0-40からブレイクを許す。最後までファーストサーブが安定していた後藤・中島ペアが優勝した。



優勝した後藤・中島ペア

女子ダブルスベスト4は次の選手。吉富 愛子③古崎 帆乃香③(愛知・椋山女学園), 廣田 真帆③岩崎 真美③(福岡・柳川), 前原 まりあ③入江 真子③(神奈川・湘南工科大附), 伊藤 夕季③梶谷 桜舞③(東京・富士見丘)。

決勝に進出したのは伊藤・梶谷ペアと廣田・岩崎ペア。序盤、柳川ペアが3-1とリードしたところで雨で中断。その後、攻めにリズムが出てきた富士見丘が一気に6-3で逆転し1stセットを取った。2ndセットは富士見3-1アップから柳川ペアも必死に拾って食い下がる好ゲームとなった。柳川の粘りに富士見がミスを重ね2-3。第6ゲームではデュースが続くこの試合の正念場となった。柳川ペアのゲームポイントもあったが最後の一本を相手の強気のショットで取らせてもらえず、逆に富士見ペアに勢いづかせる形となり、6-2。伊藤・梶谷ペアが優勝を決めた。



優勝した伊藤・梶谷ペア

<おわりに>

大会期間中の高体連テニス部ホームページへのアクセス総数は54905であった。特に決勝戦の速報を掲載した大会3日目と最終日には1日1万件を超えるアクセスがあり、関心の高さを伺わせた。

男子団体優勝の四日市工業高校は昭和41年第23回大会優勝の静岡高等学校以来、45年ぶりの県立高校の優勝である。更にエースの後藤は3冠も達成し、今年度で退職する全国高体連テニス部馬瀬部長(四日市工)への最高の贈り物となった。

団体準優勝の男子東山高校, 女子宮崎商業高校はこれまでの大会でも会場のゴミを拾いをしたり, 全日程終了後は本部にお礼を言ってから帰るなど, 周囲からの評判が高い学校である。残念なことではあるが, 思い通りにプレーできないからといってラケットを投げつけた

り、応援のルールを守らなかったり、審判のジャッジにたびたびクレームをつけたりして、会場の失笑を買う学校も少数ながらいる中、前述のような他校のお手本となっている「人気校」が勝ち上位を占めたという結果は、200回に向けての出発を意味する本大会において、参加者が「何を大切にしたい次世代に引き継いでいくか」を再確認でき意義深い。

最後に献身的に大会を支えて下さった青森県の先生方と高校生の皆さんにお礼を申し上げ、レポートを閉じることとする。

～ テニスの絆 ～



表彰式後の上位入賞者達



ジョグには仲間からのメッセージが



シングルス決勝，ダブルス準決勝後お互いの健闘をたたえ合う

